

新原道信 教授

Michinobu Nihara

異郷で生きる人の 想いを受け継ぐ

「異郷」で生きた父親が
抱いた感覚を求めて

「今起こりつつある小さな事実をよく見て、微かな声と眼差しに耳を澄まし、意味付け、再解釈し、新たな枠組みを練り上げる」ことを使命とする社会学。新原先生はその中でも地域社会学を専門とし、特に、「異郷で生きる」ことについて研究しているという。「例えば移民の場合、第一世代には、自らの意思で地域を移動した」という意識があります。けれど第二世代以降は、本来自分の血脈が息づいてきたのではない地域

で生まれ育ち、周りからは「外国人」という目で見られ、異郷にいるような違和感とともに成長し生きることになるわけです。こうした人々の感覚を知りたい、その体験を引き受けたいという思いが、私の研究の根本にあります」と先生は語る。

先生がそう考えるようになった理由の一つに、今は亡きお父さんの存在がある。先生のお父さんは日本人だったが、「移民三世」として朝鮮半島の港町に生まれた。第二次世界大戦の末期、お父さんは半ば強いられる形で特攻隊に「志願」し、日本に「帰還」する。生き残ったものの



朝鮮に帰る家はなく、そのまま故郷を離れて「異郷」の地・日本で暮らし、新たな家族をつくり、亡くなる。「人間至る処青山あり（その気になればどこでも死ぬことができる、故郷を離れることを怖れてはいけない）」と、生前よく言っていたことが先生の心に残っている。

「父親が生きていた時、その気持ちに耳を傾け受け止めようとしなかったことを、ずっと後悔しています。父の抱いていた『移動民』の感覚を理解し対話したい、その思いから『異郷で生きる』体験を持つひとに向き合っています」

在住外国人コミュニティでの苦闘と成果

在日中国人や朝鮮人のように、日本を「異郷の地」としながら国内で暮らす人も多い。先生は、神奈川県



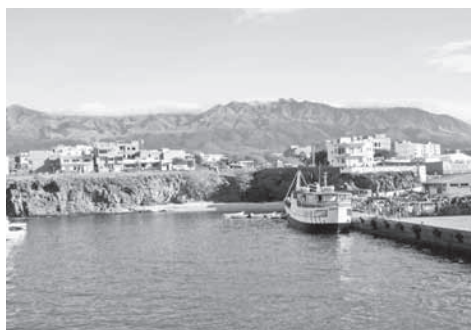
新原先生の著書

にある在住外国人が多く暮らす団地に日本語教室をつくり、運営するプロジェクトに10年ほど参加した経験を持つ。最初は苦労の連続だったと、先生は言う。「ここで暮らしていたのは、ベトナムやカンボジア、ラオスの人々。当初はフィールドワーク的な活動もして自分の研究に役立てようという思いもありましたが、コミュニティの人たちに『学者先生は帰れ』と言われてしまった。今までも、調査だけして帰るような研究者が何人も訪れたそうです。なんとかみなさんに集まってもらい、何をしてほしいか聞いたら、集会所を建て直せとか車を買えとか、言われました。こちらの覚悟が試されていたんですね」

先生は「国際フィールドワーク」も精力的に行っている。大学院生時代にサルデーニャ（イタリア）を訪れたことに始まり、ケルン（ドイツ）、コルシカ（フランス）、サンパウロ（ブラジル）など、25年の間に多くの国と地域を訪れ、現地の人や暮らしを調査している。中でも、サルデーニャはこれまでに30回以上訪れ、多くの友人がいる、先生の「デイリーライフが刻み込まれた時」となっている。

手痛い体験となった、初めての国際フィールドワーク

先生は「甘さ」を指摘したのが現地サツサリ大学のアルベルト・メルレル教授である。先生の質問に「この問いは本当に君の身体の奥深くから出てきたものか？」と疑問をぶつけたメルレル教授は、「どうしてもそのことを識らないと生きていく意味がない、というぐらい、切実な問いが君にもあるはずだ。それがまだわかっていないにしても、勇気を持って自分の殻から這い出し、前人未到の地への扉を探しなさい」と先生に言う。熱を出すほどのショックを受け、先生は「この人が一番気になる」という思いを抱く。そしてサルデーニャに通い、メルレル教授と対話を重ねて友人となり、ようやくつかんだテーマ「異郷」の研究を深めていった。



先生が、「特別な友人」メルレル教授と訪れたサント・アントン島の美しい光景

Close up クローズアップ



■ 新原 道信 (にい はら みちのぶ) プロフィール

1959年、伊豆半島生まれ。1977年、静岡県立韮山高等学校卒業。1983年、名古屋大学文学部哲学科卒業。1985年、東京大学教養学部相関社会学科研究生。1988年、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。1990年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程中退。千葉大学文学部助手、横浜市立大学商学部助教授、同大学院経済学研究科助教授を経て現職。

■ 専門分野

・社会学

■ 趣味

心許せる友と一緒に旅をして、新たな土地や人と出会うこと。

■ どんな高校生でしたか？

「ここぞ」という時にかんばることができなくて、我ながら「本当にダメ人間だなあ」と思っていました。優等生だった母親からは、「なぜあなたはいつも一番じゃないの?」と言われ続けました。高校を卒業し親元を離れたら、「いい結果にはつながらないとしても、なにかに「渾身の力」で取り組んでみたい」と思っていました。「今ここにいる自分」ではないものになってみたかったです。

■ お勧めの本を3冊あげてください。

- 『君たちはどう生きるか』吉野源三郎(岩波文庫ワイド版)
人間として生きる「背骨」をつくるための力になる本です。著者の吉野さんは、古在由重先生に、「……大切なのは、機会が来ても攻勢に出られないような無気力と無実力に陥らないこと」という手紙を贈られたそうです。
- 『見知らぬわが町』中川雅子(葦書房)
ある女子高生の「夏の自由研究」を本にしたものです。知っているつもりで「識らなかった」ことを素直に認め、「わが町」を探究していく姿勢に背筋を正されます。

(3) 『旅をして、出会い、ともに考える』

新原道信(中央大学出版部)

自著です。「旅／フィールドワーク」を続ける中で、これから旅立つ若い人を励ます文章を書きたいと考えようになりました。若い人たちが自分の足で歩いていく時のささやかな地図になればと思い、自分の試行錯誤の数々をできる限り包み隠さず書き記しました。



■ 特別な1冊

・『精神現象学』ヘーゲル

真下信一先生が、自らの命を描き遺すようにして読んで

くださった本です。「この人に会いたい」という気持ちだけで先生のご自宅に近い大学を選び、「押しかけ弟子」にさせていただきました。この本は恩師の記憶とともに、身体の隅々にまで「埋め込まれ／刻み込まれて」います。

■ 高校生へのメッセージ

大学ではなく、「師」を選ぶ、という視点があってもいいと思います。どの分野にも、渾身の力でその人にしかいないものを創ろうとしている人が、わずかながら存在します。そういった「智の職人」を、本に接するなどの行動を通じて自分の眼力で見出し、師として選んでほしいと思います。そしてゆっくりと、やわらかい気持ちで、よき人生の旅をしていってください。

人間は、 人間でしか救われない

「人のことを考える余裕がまったくないような時でも、惜しみなく与えられる」ような自分をつくってほしい。それが、先生が学生に寄せる願いだ。そんな先生に、これから大学という新たなフィールドへ一足踏み出そうとしている高校生へのメッセージを伺った。

「身の回りで最も不条理な苦痛を被っている人の声や息づかい、表情に心を寄せることを、行動の基本に据えてください。そして自分が最も苦しんでいる時は、人に対してどうするよう自分に自分を大切にしたい。一見、損する生き方と思われるかもしれませんが、自分の努力ではどうにもならない苦難のただ中にいる時、この「かまへ」が皆さんを救ってくれると思います。人は誰でも、言葉や想い、困難な状況をわかち合う友愛を必要とする。苦勞し失望することもたくさんあるけれど、それでも「出会うこと」への勇氣を持ち続けてほしい、と先生は温かな口調で語った。そして最後に、多くの体験を経て先生がつかみ取った一つの言葉を贈ってくれた。「人間は人間で苦勞するけれど、人間でしか救われない。」



在外研究の成果であり、先生の肉声が詰まった本。



在外研究中、サッサリ大学に向かう途中で先生が幾度も通ったサルデーニャ内陸部の平原

フィールドワークを通じ、 困難に向き合う人材を育成

先生の授業は、地域社会やコミュニティの中でフィールドワークを行いながら「共生」に寄与する人を育成することを目的としている。そのため大切なこととして、2つのポイントを先生は学生に伝えている。

1つ目は「フィールドワークの対象となる側への深い配慮と理解」だ。「フィールドワークは時に『暴力』になる」と先生は言う。「突然やってきて自分たちの仕事や暮らしを乱す研究者は、相手にとっては『迷惑なお客さん』です。それを自覚し、自分の中にある、無意識の無関心さや厚かましさを減らす努力をしなければ

ばいけません」。フィールドへの参入を許されるのは、自分の内側から出てくる問いをきちんと言葉にして伝え、その結果相手に認められて中へ入るのを許された時だけだ。

2つ目は、「多重性と多層性、多面性と多声を確保すること。ある集団や地域を悪い方向に導かないためには、人々の意見がまとまらず、居心地の悪い中で試行錯誤を続けることこそが重要だからである。個人の場合でも、悩むなどの「すっきりしない」状態を厭わない。他者との間で、自己の内側で、対話を重ねる「多声の時間」は、意義ある体験になることが多い、と先生は言う。

先生のゼミに所属する学生は、自分のやりたいテーマを探索してフィールドを選び、飛び込む。そして達成した内容をゼミで報告して仲間と意見を言い合い、協力しながら卒業論文をまとめていく。「それぞれのフィールドで奮闘しつつ、それを論文という『作品』にまとめる際には、複数の目と声でつくり上げています。こうして厚みと深みのある『多声的』な作品をつくり上げた学生たちは、大学を卒業した後、職場や家庭、地域などでフィールドワークの手法を活かしながら、新たな環境と困難に粘り強く向き合う人材として成長していきます」